



岡崎衛さん
株式会社manaby代表取締役。大学在籍中から障害者の就労支援に携わる。2016年、現在の会社を設立。1987年、仙台市生まれ

市長 人と人をつなぐことで、個々の活動をパワーアップさせるコーディネーターのような役割は、



菅野裕喜さん
仙台筆筒職人。大工の経験を経て、2006年有限会社長谷部漆工に入社。2019年12月、全国伝統的工芸品公募展経済産業省製造産業局長賞受賞。1983年、京都府生まれ

市長 あけましておめでとうございます。昨年、仙台市は市制施行130周年、政令指定都市・区制移行30周年という大きな節目を迎え、次のステージへと歩み出しています。ここ仙台でチャレンジを続ける若い世代の皆さんに、その原動力や将来の展望などについてお話しいただきたいと思っています。まず初めに、皆さんの活動内容について教えてくださいませんか。

市長 私は、T H E 6の企画運営やまちづくりイベントの企画、書籍の編集などを行っています。T H E 6では、シェアオフィスやミートینگ、イベントなどにスペースを貸し出すだけでなく、何かをやりたい人が仲間を増やしたり、新たな一歩を踏み出すお手伝いをしています。例えば、もっと商品の魅力を高めたいという方に、T H E 6を利用してデザインを紹介してパッケージを見直すなど、人と人をつなぐ、いわば場づくりができればと思っています。

市長 普段の生活に合った防災の知恵や工夫を伝えることで、ご家庭でも平時からの備えに取

岡崎 私は防災士の方に初めてお会いしたのですが、どのような活動をされているんですか。

強みを掛け合わせる

市長 「仙台」の名を冠した伝統工芸を若い方が継承してくださることは大変うれしいですね。



桃生和成さん
一般社団法人Granny Rideto代表理事。2008年せんだい・みやぎNPOセンターに入職。2016年に現在の法人を設立。1982年、仙台市生まれ

菅野 祖父が大工をしていますが、幼い頃からものづくりに興味がありました。定義山の五重塔に感銘を受け、最初は宮大工を志したのですが、弟子入りを希望した棟梁のもとには職人の空気がなく、その道は諦めなくてはなりません。その後、古い筆筒の修理を手伝ったときに、名工が作った仙台筆筒に出会い、その迫力と魅力に衝撃を受け、この道に進むことを決めました。



佐藤美嶺さん
防災士。各地で子育て世代向けの防災講座等を行う。仙台市地域防災リーダー(SBL)としても活動。1982年、山形県生まれ

市長 災害時には障害のある方にもいろいろな困難があると感じます。岡崎さんのところに通って来られる障害のある方と佐藤さんの活動を掛け合わせたら、解決の一歩になりそうですね。

新春市長座談会

仙台の未来を創る若い力



株式会社manaby 代表取締役

岡崎 衛

有限会社長谷部漆工 仙台筆筒職人

菅野 裕喜

防災士

佐藤 美嶺

一般社団法人

Granny Rideto代表理事

桃生 和成



THE 6(青葉区春日町)

仙台を挑戦の場として選び、各分野で活躍する若い世代の4人のゲストをお迎えし、活動に懸ける思いや今後のまちづくりなどについて、郡市長と語り合っていました。

市長 その人が働く場所に合わせることができるといえるのは、これからの時代の大切な視点ですね。桃生さんからは、この座談会の会場として、ご自身が運営されているシェア型複合施設「THE 6」をお借りしました。木の温もりのある空間に広々としたデスクやオープンキッチンなどあつて、新たな出会いや発想が生まれそうな素敵な場所ですね！桃生さんは普段どういった活動をされているのですか。

のある方との関わりについて教えていただきたいです。

桃生 菅野さんが今日持ってこられた「仙台筆筒のオーディオスピーカー」は、ご自身で全て作られたのですか。

菅野 仙台筆筒は、指物、漆塗り、金具の3つの技術で成り立っていて、これも各分野の職人で試行錯誤しながら作りました。実はこのスピーカーは、海外との職人交流事業がきっかけで出会った、大学の先生方との交流から生まれたんです。漆を塗って、磨く作業を繰り返すことで生まれる堅さが音の響きに良い影響を与えるようです。工芸は、地域の文化を「物」に託して伝えるツールと考えています。スピーカーに注目してもらおうことで、地元の魅力が伝えられたらと思います。

市長 皆さんのアイデアと技術が結集して、伝統の世界に新たな息吹がもたらされているんですね。



菅野 家の収納が筆筒からクロゼットに移り変わる中で、仙台筆筒の技術を生かして何を作れるか、ということは常に考えています。スピーカーのように外からアイデアをもらうことは、職人自身がこの技術の可能性に気付く機会にもなります。

仙台から挑戦する

市長 岡崎さんは関東でも事業展開されていますが、仙台を拠点にしているのには理由があるのですか。

岡崎 仕事の量でいえば関東の方が多のですが、生まれ育った仙台が一番過ごしやすいため、仙台に本社を置いて自分の理想とする企業をつくりたいと思っています。今、若い人が関東に出て行って、厳しい環境の中で実力をつけています。仙台でも若い人が競い合い、研さんを積めるような環境にしたいですね。

市長 菅野さん、桃生さんはどうですか。仙台で活動を続ける意味など聞かせていただければ。

菅野 仙台には長い間住んでいるのでとても愛着があって、仙台と名の付く工芸品に出会い、仕事として誇りに誇りを持っていきます。地元の人たちの感性で受け継がれてきた工芸品を、地元で根付

いた人間が作ることで伝わる、説得力のようなものがあると信じています。今後もこの地域で仙台筆筒を作り続けていきたいと思っています。

桃生 私は、生まれが仙台、育ちが福島、大学が岩手です。この3県が、東日本大震災で特に大きな被害を受けたことが大きいですね。大災害を経て、価値観が変わった仙台・東北だからこそ、東京にはない新しいもの・ことが生み出せるのではないのでしょうか。中でも仙台は、東北各地をつなぐ結節点の役割を持っていると思いますし、分母も大きいので、いろいろな掛け算ができると思います。私自身もジャンルにこだわらず、もっと横断的に「つなぐ」という役割を極めていきたいです。

市長 人とのつながりは、生きていく上でも社会活動をしていく上でもとても大切なことです。行政としてもそれぞれの経験や考えを掛け合わせることで、相乗効果を生み出せるまちづくりをしていかなければなりません。佐藤さんは、仙台出身ではありませんが、今の活動を支えている思いなど何かありますか。

佐藤 私は自分の住む地域を大事にしたいという思いで活動しています。同時に、防災関連の会社で



築40年以上の建物をリノベーションして、平成28年にオープンしたTHE 6

働いたり、新しい制度や防災対策などを勉強したりしながら、最新の情報と地域の特性を押しあえつつ、防災対策が地域の中で当たり前になるようにと思って活動しています。

菅野 仙台・東北で活動し続けるためにも、自分たちがやっていることを知ってもらえる場が欲しいです。東北の玄関口として、東北全体を知ることができて、地域に根づく工芸や文化も見えて学べる、工芸館のような場が仙台にあれば、職人の思いも伝わりやすいと思うのですが。

岡崎 伝統工芸を知ってもらおうきっかけとして、THE 6みたいなスペースに職人が集まって伝統工芸を紹介する、ものづくりを体験するような場はどうでしょうか。

市長 なるほど！興味深いですね。佐藤 私のように転勤や結婚で仙

台に来ると、地元のことを学ぶ機会はなかなかないので、そういう場があったらうれしいです。

桃生 関西では中心部でも若い人が比較的安い家賃でお店などを始められますが、仙台ではそれが難しい。空間や車などをシェアすることも増えていますし、都市部の空きスペースの有効活用や古い建物のリノベーションなど、発想の転換も必要かなと思います。

岡崎 行政に頼りきりにならず、民間が自身の力を発揮することも大事ですね。

佐藤 行政が企業や市民をつなぐという視点の支援があってもいいのかなと思います。さまざまな自治体に住んできましたが、仙台はやりたい、何とかしたいという思いを持った方が多いですね。市民がやりたいと思うことを行政と一緒に考えてくれたら、一層魅力的なまちになるのではないかと思います。

市長 行政としても直接現場に向いて、市民の皆さんの活動を知ることが重要だと思っています。課題解決に向けて、柔軟に対応していくことも大切な視点ですね。

挑戦を応援するまちに

市長 市では、これからも人が輝くまちづくりをしたいと考えてい

ますが、今後のご自身や仙台のまちの展望を聞かせてください。

岡崎 おおむね5年以内に株式会社場を目指す「仙台未来創造企業」として仙台市さんに選んでいただいているので、上場を実現したいです。個人的にはベンチャー支援などもやれば。若い人が仙台に残ろうと思えるように、市内に本社を置く企業の活躍を後押しするような支援がますます広がればと思います。

桃生 テクノロジーは今後、劇的に変わると思いますし、未来の予測がつきにくい時代なので、的確に決断できる力と何事にも対応できる柔軟性を身に付けたいですね。まちづくりについては、行政は頼られる存在であると同時に、民間に委ねられるところは任せていただければ。

菅野 私は自分の子どもたちが将来を考えると、その選択肢の一つに仙台筆筒の職人という仕事が残っていてほしいと思っています。そのためにもいずれば独立して、自分の力でものを作っていきたいです。

佐藤 ネットワークを全国に広げ、協力し合う関係を築いていきたいです。それから、マンションや企業で防災対策をしっかりとしていることが社会の中で付加価値とし

て認められるように、防災の重要性の理解が進むような活動をしていきたいと思っています。

市長 最後に、これからチャレンジしようとする若い人たちへメッセージをいただけますか。

佐藤 何でもやってみたらいいと思います。私も自分から講座をやらうと思って始めたわけではありませんが、意外に面白かったり、人とのつながりが楽しかったりで続いています。何一つ無駄なことはないので、挑戦してほしいです。

菅野 出会ったものを否定せずに一回首を突っ込んでみようという意気込みで、チャレンジすることが大切だと思います。もっと仙台筆筒を知ってもらいたいです！

岡崎 何かやりたいと思ったときに、仙台は相談できる場もたくさんありますし、困ることはないと思います。自分の気持ちに正直に、やろうと思ったら進むことです。

桃生 今はホームページやSNSなど、手軽な手段がたくさんあって、チャレンジするためのコストやハードルが低くなっ

てきています。また、自分がやりたいことを仕事にできる方法もこれからもっと出てくると思います。ためらわず新しいことにどんどん取り組んでほしいですね。「自分の心に正直であれ」という感じがあります。

市長 これからのまちづくりのヒントにもなるお話をたくさんいただきます。皆さんの今後のますますのご活躍を期待しています。ありがとうございます。



仙台筆筒のオーディオスピーカー（中央）を囲んで